

ソ連時代におけるボリショイ劇場のオペラ上演状況¹⁾

古典レパートリーの優勢とソヴィエト・オペラ上演体制の変質

中 田 朱 美

1. はじめに

本研究の目的は、モスクワのボリショイ劇場 Gosudarstvenniy akademicheskiy Bol'shoy teatr Rossii の音楽資料室に所蔵されている上演記録を用い、1917 年から 91 年までのソ連時代の同劇場本館及び別館の上演状況について解析することである。本稿ではその結果を、ソヴィエト・オペラを軸に報告する。

ボリショイ劇場の上演状況に関する先行研究を見ると、とりわけ近年のものでは発掘された一次史料を駆使し、当局の文化政策との関わりとともに重要オペラの創作背景や初演状況を省察するものが目立つ。ここではなかでもボリショイ劇場のオペラ上演にかかわるものとして、3つの研究に注目したい。まず 2010 年に出されたヴラーソヴァ Vlasova の『ソヴィエト音楽における 1948 年：一次史料にもとづく実証的研究』²⁾ が挙げられる。1948 年のジダーノフ批判へといたる音楽界全体の流れを俯瞰しながら、その主軸の一つとして、当局とソヴィエト・オペラとの必然的な関係を炙り出している。具体的には党中央委員会、さらにはスターリン本人とボリショイ幹部とのやり取り、また法外な助成支援、題材の指導、演目や関係者の選定などといった、ソヴィエト・オペラ制作に向けた直接的な管理統制が検証されるとともに、1948 年までのボリショイ劇場の公演状況についても言及されている。最終的に、当局の統括から独立してレパートリーを構成することができていたレニングラードの劇場を除き、「ボリショイ劇場のレパートリーはこの国の他の音楽劇場にとって、模倣すべきお手本であった」(Vlasova 2010: 359)と結論づけている。

2つ目は、同じくヴラーソヴァの 2017 年の論文「スターリン主義によるオペラ事業 The Stalinist Opera Project」である。ここでは、先の論を展開させ、スターリンが直々にボリショイ劇場におけるソヴィエト・オペラ制作に対する指揮を執っていた様子、その例として、当時試みられたソヴィエト・オペラ・コンクールなど、ソヴィエト・オペラ創作のための事業が言及されている。これも上演演目の俯瞰を目的とした論文ではないが、巻末には 1917 年から 1953 年までのボリショイ劇場におけるソヴィエト・オペラの初演リストが掲載されている。

3つ目は、本研究にとって直接的な参考資料となった、ザルービン Zarubin の 1994 年

1) 本稿は 2018 年 11 月 3 日第 69 回日本音楽学会全国大会(於：桐朋学園大学)での発表原稿を加筆・修正したものである。

2) 殊に 39～79、344～359 頁。

の著作『ボリショイ劇場：オペラのロシア初演、1825～1993年』である。ここではこの間にボリショイ劇場でロシア初演となったオペラ公演が、出演者やあらすじの情報とともに、時系列で掲載されており、ソヴィエト・オペラに限らず、あらゆる国のオペラが対象となっている。調査資料は当時のポスター、プログラム、パンフレットとある。抽出されたオペラは全部で138作品、うち、1917～1991年に初演された演目は38作、さらにソヴィエト・オペラは27作である。また一部の作品に関しては、新演出の舞台初演にかんする情報も掲載されている。

そしてこれらの文献に加え、重要な資料としてボリショイ劇場の公式ウェブページで公開され始めた「電子アルヒーフ」を挙げておきたい(ロシア語のみ)。このページでは、ボリショイ劇場がレパートリーとして扱ったオペラ作品、およびその初演情報(世界初演、ボリショイ初演、さらに新演出の初演)にかんする公演情報がほぼ網羅されている。2019年1月現在、あらすじは掲載されていない。検索機能がついている点で飛躍的な効率化が見込め、大変に有用な資料となっている。³⁾ 現行の説明からは、チラシ、ポスター、プログラムといった一次資料にもとづくオペラ・バレエ公演の総目録化のほか、衣裳スケッチなどの画像資料のリンクも目的とした壮大な事業である様子が窺える。⁴⁾ 掲載内容に鑑みると、現在のところは「オペラとバレエの初演・新演出版初演にかんする時系列目録」となっている。

以上の先行研究や資料からは初演情報のほか、体制的作品や批判対象となった作品が浮かび上がるが、それらがどういった日常の中での出来事だったのかは依然として見えてこない。実際にボリショイ劇場が日常的にどのような上演状況にあり、その中でどういったソヴィエト・オペラがどの程度、取り上げられていたのか、つまり人々が触れることができる状況だったのかは、これまで俯瞰されてこなかった。様々な形で影響力の大きかった作品を軸に言説が生まれ、歴史に記録されていくのは歴史の常だが、殊「対ソヴィエト音楽」のように、冷戦期に端を発するイデオロギーが後世にとっていまだ根強い事象に関しては、飛び出した「杭」を取り上げるだけでなく、それを囲んだ無数の点を繋げることで、「杭」の意味も大きく異なって見えてくることだろう。他でもない後世の我々になおも押し掛かるイデオロギーの効力を認識した上で、ソヴィエト時代を生きていた人々と何か共有できるものがあるとすれば、それは良くも悪くも大事に至らない日常に隠れていると考える。そうした日常が確認されて初めて、さまざまな時局をまたぎ、さらにはソ連崩

3) 電子アルヒーフの公開時期に関する情報が2019年1月現在は見当たらないが、筆者がかつて確認したところ、2017年11月であった。2018年秋～冬には電子アルヒーフのサイトは閉じられていたが、2019年1月現在、再開されている。データベース化の最中であって当然のことながら説明文やデータが刻々と変わるものの、目覚ましい充実化が図られている。

ロシアの歌劇場では、メトロポリタン・オペラのような過去情報の網羅的な電子データ化やそのウェブ公開は、まだどこも実現していない。その中で、一歩も二歩も進んでいるウェブページが、ボリショイ劇場の当該電子アルヒーフである。データベース化に要する膨大かつ緻密な作業に心から敬意を表するとともに、今後の展開を大いに期待したい。

4) 「電子データの公開 Elektronniy archiv otkrit」 <http://archive.bolshoi.ru/news/3858995?index=14>

壊後や 21 世紀ロシア、過去の帝政ロシア時代へとつらなる通時性、国外との共時性が見えてくるのではないだろうか。

筆者は 10 年以上前から、ボリショイ劇場に限らず、ソ連時代の主要劇場の上演状況をどうにか概観できないものか、関連資料を探してきた。だがソヴィエト時代を総覧できる目録のような資料は見当たらず、手をこまねいていた。そんな中、2016 年 2 月に行った現地調査で、ボリショイ劇場音楽資料室 Muzey Bol'shogo teatra に所蔵されていた「上演記録ファイル」を目にすることができ、さらに撮影を許可していただいた。2007 年から同音楽資料室には度々訪れていたが、何う度に整理が進んでおり、ようやく当該資料の閲覧が叶った。本資料はこれまで同室をはじめ、各機関で集めてきた関連資料の中で、ソ連時代の歌劇場の上演状況に関するもっとも網羅的な資料といえ、本論はこの資料の解析に基づくものである。

2. 検証資料

当該資料の解析作業は本稿が初となるため、まず資料の詳細と解析方法を確認しておく。ここでは便宜上「上演記録ファイル」と呼ぶが、これは複数の媒体からなり、本研究に関係するのはファイル、帳面からなる下記 9 点の資料である。

- ① 『1860～1959 年のボリショイ劇場上演目録 Repertuar Bol'shogo teatra s 1860 po 1959 gg.』(大型ファイル)
- ② 『1960 年以降のボリショイ劇場上演目録. 初演情報 Repertuar BT s 1960-. Prem'erī.』(大型ファイル、1971 年末まで掲載)
- ③ 『帳面第 6 号 1966 年 9 月～1970 年 6 月の本館・別館上演目録 KNIGA № 6 Repertuar GABT SSSR i KDS s sentyabrya 1966 goda po iyun' 1970 goda.』(硬表紙本)
- ④ 『帳面第 7 号 1970 年 8 月～1973 年 7 月の本館・別館上演目録 KNIGA № 7 Repertuar GABT SSSR i KDS s avgusta 1970 po iyul' 1973 goda.』(硬表紙本)
- ⑤ 『帳面第 8 号 1973 年 8 月～1976 年 7 月の本館・別館上演目録 KNIGA № 8 Repertuar GABT SSSR i KDS s avgusta 1973 goda po iyul' 1976 goda.』(硬表紙本)
- ⑥ 『帳面第 9 号 1976 年 9 月～1981 年 7 月の本館・別館上演目録 KNIGA № 9 Repertuar GABT SSSR i KDS s sentyabrya 1976 po iyul' 1981 goda.』(硬表紙本)
- ⑦ 『帳面第 10 号 1981 年 9 月～1985 年 9 月の本館・別館上演目録 KNIGA № 10 Repertuar GABT SSSR i KDS s sentyabrya 1981 po sentyabr' 1985.』(硬表紙本)
- ⑧ 『帳面第 11 号 1985 年 10 月～1989 年 7 月の本館・別館上演目録 KNIGA № 11 Repertuar GABT SSSR i KDS s oktyabrya 1985 po iyun' 1989.』(硬表紙本)
- ⑨ 『帳面第 12 号 1989 年 9 月～1997 年 7 月のボリショイ劇場上演目録 KNIGA № 12 Repertuar Bol'shogo teatra s sentyabrya 1989 po iyun' 1997.』(硬表紙本)

①と②は2穴の大型ファイルで、手書きリストから綴じられている。1917年からはタイプライター原稿となる。様々な書き込みが観られる。③以降はハードカバーの帳面で、手書き資料である。

基本的に【図表1】のように本館と別館で上演された演目がカレンダー式に一覧されている。

【図表1 例：1936年初頭の場合】

	月	日	本館 Osnovnaya stsena	別館 Filial
1936	1	1	イーゴリ公	リゴレット
		2 朝	せむしの仔馬	－
		2 夜	エヴゲーニイ・オネーギン	ムツェンスク郡のマクベス夫人
		3	明るい小川	セヴィリアの理髪師
		4	ブスコフの娘	ファウスト

略号の使い方などから、本資料からは1年毎など定期的に過去の公演を一覧し、清書・蓄積された様子が窺える。たとえば1953年3月6～9日には本館・別館ともに「スターリン逝去のため公演中止」という記載があるなど、実際の上演状況が反映された一覧となっている。つまり当初のチラシ、ポスターや、雑誌、新聞に掲載されている公演案内には記載しえない変更情報も盛り込まれている。

所々に穴もあるため、今後、一次史料との対照作業は不可欠であるが、統計データとしては現在どこにも例を見ない規模の母数を担保しており、傾向を捉えるには十分かつ有用なデータと考える。

3. 検証方法

続いて、検証方法を確認したい。上記資料からオペラ上演状況を概観するにあたり、まず「電子データ化」、「イベント種別の分類」、「ボリショイ劇場オペラ公演の対象化」という3つの作業工程を踏んだ。

3.1. 電子データ化

まず、記載のあった1917年8月から1991年末までの上演演目を入力し、電子データ化した。結果、入力データは43,181件となった。

3.2. 入力データのイベント種別を分類

続いて、上記の入力データに対し、イベントの種別を分類した。その結果、記載されているイベントには、下記の6種類があることが分かった。

- 1) 本館・別館の通常公演
- 2) 観客を限定した公演：「小学生のための」、「学生のための」、「赤軍のための」など

- 3) 記念公演：作曲家や作家の生没年；革命記念；国際婦人デー；100 回記念など
- 4) 客演公演：諸共和国の主要劇場による「文学・芸術旬間 dekada」中の公演；ロシア国内の歌劇場による公演；外国の劇場による公演など
- 5) 演奏会：ボリショイ劇場管弦楽団の演奏会；所属歌手・室内楽団による演奏会；ロシア人音楽家による演奏会；外国人音楽家による演奏会など
- 6) その他のイベント：共産党中央委員会記念式典；出張公演；オペラやバレエ以外の公演；特別公演中の抜粋上演；GP や非公開公演など

まず 1)「本館・別館の通常公演」だが、これは上述した資料③『帳面第 6 号』（1966 年 9 月～）以降のものに記載のあった通算公演数の数字の有無を参考とした。つまりこの数字が書かれているイベントを通常公演、それ以外を特別公演として判断した。

また現在のモスクワ国立アカデミー舞踊学校⁵⁾ による公演が相当数認められた。⁶⁾ ボリショイ劇場の附属舞踊学校であり、演奏はボリショイ劇場管弦楽団が行ったと考えられること、また演目に「+」が書かれるなど省略・パターン化されていたこと、電子アルヒーフにも一部データが含まれていること⁷⁾ から、演目の分かるものは通常公演扱いとし、「卒業公演」などのみ書かれているものについては 6)「その他のイベント」扱いとした。

2)「観客を限定した公演」、3)「記念公演」でも、オペラやバレエの演目が分かるものは通常公演に含めた。

4) の「客演公演」には、周辺共和国の主要劇場が 10 日間前後にわたって開催する「旬間 dekada」という芸術祭の関連公演や、レニングラードのキーロフ劇場やマールイ・オペラ・バレエ劇場など、国内外の歌劇場の引っ越し公演が該当する。こうした公演には演目などの情報も書かれているが、通算公演数は記載されていない。つまり資料上、ボリショイのレパートリー公演とされていない。

5) の「演奏会」もかなりの頻度で開催されていた。

6) の「その他」には様々なイベントを類別した。演劇や軽音楽ショーなどの公演、ボリショイ劇場自体の出張公演などである。この他、記念式典などの特別公演で一部抜粋の形で上演された演目も、ここに含めた。⁸⁾ 4)～6) は内容上、重複するものもある。

5) Moskovskaya gosudarstvennaya akademiya khoreographii. ソ連時代の名称は、「ボリショイ劇場附属舞踊学校」が略称となる。度々改称されているため、詳しくは下記 URL を参照されたい。
<http://balletacademy.ru/about/istoriya-akademii/prezhnie-nazvaniya-mgah/>

6) そのほとんどが《くるみ割り人形》であった。

7) 2019 年 1 月現在、他劇場の客演公演をはじめ、「3.2 イベント種別」の 4)～6) に該当する公演は電子アルヒーフに含まれていない。

8) 《シルフィード(第 2 幕)》、《ガヤネー (第 4 幕)》など(多くの場合パターン化しながら)複数の小規模作品を組み合わせたプログラムの中で抜粋上演された演目は、通常演目の中に含めた。6)「その他」に含めたのは、党大会最終日の記念公演など、イレギュラーな抜粋上演である。

悩ましくはあったが、上記同様、通算公演数が記載されていないことからその他に含めた。これは特にバレエで多かった。

これらのデータのうち、4)～6)を除外したものを、ボリショイ劇場の通常公演として捉え、限定した。

3.3. ボリショイ劇場オペラ公演の対象化

最後に、上記データに対して下記7項目を精査し、ボリショイ劇場の通常のオペラ公演を検証し、対象化した。

- a) 上演日(年月日)
- b) 演目
- c) 初演ないし新演出初演の情報
- d) 会場：本館 or 別館
- e) 作曲者名
- f) 言語別、時代別：ロシア or ソヴィエト
- g) ジャンル：オペラ or バレエ

a)～d)の情報は検証資料に記載されている内容である。このほかのe)～g)は筆者が補完した。

e)「作曲者名」に関して注意を要したのが、同名作品の判別である。こうした場合には、先述した電子アルヒーフが大いに役立った。ここでは(一部、「上演記録ファイル」と内容が異なるものの、)ボリショイ劇場における初演だけでなく、同劇場の新演出版による初演情報も掲載されているため、作品および作曲者名をほぼ特定することができた。例外的な作品に関しては脚注を参照されたい。⁹⁾

9) 同名作品の作曲家の判別が難航した作品について、以下で確認しておきたい。

《ルサルカ》にはドヴォルザークとダルゴミーシスキのオペラが該当するが、電子アルヒーフにはドヴォルザークの記載がなかったため、すべてダルゴミーシスキ作品として扱った。

《ロミオとジュリエット》にはグノーのオペラとプロコフィエフのバレエが該当する。が、これも電子アルヒーフ初演情報との対照、および「上演記録ファイル」中に記載されていたプロコフィエフ作品にかんする「100回目公演」、「130回目公演」という記録から、プロコフィエフ作品が1946年12月23日に初演されて以来、別館と本館でそれぞれ取り上げられていた様子が窺えた。そしておそらくグノー作品は1954年2月を最後に上演されなくなり、以降はもっぱらプロコフィエフ作品が上演されたものと推測される。

《ドン・キホーテ》には、帝政時代にボリショイ劇場で上演されていた作品として、マスネのオペラとミンクスのバレエがある。【電子アルヒーフによると、マスネのオペラの初演情報は1件(1910年11月12日)、ミンクスのバレエの初演情報は10件(1869～2016年)。マスネ作品のボリショイ上演は、このオペラの世界初演(1910年2月19日、モンテカルロ歌劇場)で主役を演じたシャリヤーピンが関係したことで叶ったものと推測される。】本研究の対象期間中、《ドン・キホーテ》は1917年9月10日を皮切りに、10月8日、11月29日、12月10日と続き、この後も1989年まで毎月1～2回以上、計722回登場している。この詳細については現段階では検証の仕様がなない。しかし『ロシア音楽史第10B巻第1分冊1890～1917年』(Istoriya russkoy muziki 2011: 558)によると、直近では1916年10月2日にミンクスのバレエが新演出版でボリショイ劇場にて初演されていたこと、また現在の上演状況に鑑みて、すべてミンクスのバレエ作品として扱った。

なお、同『ロシア音楽史第10B巻第1分冊』(299～576頁)には、「サンクト・ペテルブルグとモスクワの劇場生活」として、帝政ロシア末期の両都市の劇場の上演状況の年表が掲載されている。全

また f) 「言語別、時代別」では、基本的に初演時の使用言語で類別した。とはいえソヴィエト時代、外国語オペラは大抵ロシア語訳で上演されていた点に注意されたい(各公演の上演言語にかんする精査は今後の課題である)。¹⁰⁾ 以下では「イタリア語オペラ」などと表記する。

例外的な作品として、音楽劇扱いとした《兵士の物語》、《3つのオレンジへの恋》はともにストラヴィンスキイとプロコフィエフが国外滞在中に執筆した作品であるため、祖国との関係性が分かりやすいよう、国外ロシアとした。

さらにロシア語に関してのみ、帝政ロシアとソヴィエトの時代を区分するために、ロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国となった1917年以降、ソ連崩壊の1991年までに初演された作品を「ソヴィエト」と類別した。もっとも後述するが、最初にソヴィエト・オペラが登場したのは1924年であるため、「ソ連邦」(1922年～)になってからである。

判断が難しい作品に、《皇帝に捧げた命》の歌詞をソヴィエト時代に改訂した《イヴァン・スサーニン》がある。これは「ソヴィエト」としても良い作品だが、上演回数からは明らかにロシア・オペラ、グリーンカ作品として上演されていた様子が窺えたため、「改訂」と記載の上、「ロシア」として扱った。¹¹⁾

このように原曲のタイトルや台本を改訂した上で上演する行為は、1920年代ネップ期における「ソヴィエト・オペラ」制作の端緒ともいえ、珍しいものではなかった。この時期、ボリショイ劇場以外の国立劇場では、19世紀オペラの台本を革命と絡めた内容へと大きく改訂し、上演することがよくあった。たとえばグリーンカ《皇帝に捧げた命》は《鎌と槌 Serp i molot》、プッチーニ《トスカ》は《コミューンのための闘い V bor'be za

公演ではなく、以下(a)～(c)が抽出されている【(a) 初演情報(ロシア、サンクト・ペテルブルグ or モスクワ、諸劇場にかんする)、(b) 新演出の初演情報、(c) 注目に値する公演情報(再開公演、記念公演、慈善公演、招聘アーティストとの公演)】。ここでミンクス《ドン・キホーテ》新演出版情報として掲載されている1916年10月2日の情報は、2019年1月現在、電子アルヒーフには掲載されていない。

《雪娘》には、リームスキイ＝コールサコフのオペラとチャイコフスキイの音楽劇 Op.12 があり、両作ともソ連時代、ボリショイ劇場で上演されている。電子アルヒーフ、同劇場ウェブページの過去のプレス・リリースなどを参考に、1947年3月7日～1949年6月27日に7回、いずれも別館で附属バレエ学校の公演で取り上げられた《雪娘》のみをチャイコフスキイ音楽劇のバレエ振付版として捉え、残りの426回の《雪娘》はリームスキイ＝コールサコフ作品として数えた。

今回もっとも判別が難しかったのが、《モーツァルトとサリエリ》であった。同名の作品として、有名なリームスキイ＝コールサコフのオペラの他、ヴェーラ・ボッカドロ台本・振付でモーツァルトとサリエリの音楽を使ったバレエが該当する。後者は1973年12月に初演され、1976年末以降はときに同じ本館側で、両作とも上演されていた。通算数字の他、それぞれが決まったオペラ小品やバレエ小品と組まれていた上演状況が窺えたため、それらを参考に振り分けた。

10) ザルービンによると、《椿姫》、《リゴレット》、《仮面舞踏会》、《ドン・カルロ》など、19世紀には当初、原語上演されていた演目があったようである。(Zarubin: 59, 67, 91, 149)

11) また注意したい作品としてプロコフィエフの《賭博者》がある。これは、メイエルホーリドからの依頼を受け創作が始まり、第2稿が1928年にロシア語で完成していた。その後、フランス語訳され、1929年に世界初演された作品である。その後のソヴィエト内での動きとして、63年に演奏会形式でのソヴィエト初演、67年に第2稿のロシア語テキストでの楽譜が Muzika 社より出版、74年にボリショイ劇場で舞台初演されたことから、「ソヴィエト」扱いとした。

kommunu)、マイアーベア《ユグノー教徒》は《デカブリスト Dekabristi》、ビゼー《カルメン》は《カルメンシタと兵士 Karmensita i soldat》等々と改訂されている(中田:38-39)。だが、こうした1920年代の時事的な改訂上演が、ボリショイ劇場では一切行われなかった状況も今回の調査で明らかとなった。こうした側面からも、党機関の管理の下、ボリショイ劇場がもっとも保守的な国立劇場であった様子が垣間見える。

《イヴァーン・スサーニン》はこうした革命下に時代設定を移した改訂オペラに類するものではなく、おそらくこれも遠因となり、改訂版としてはきわだってレパートリー定着が叶った。まずボリショイ劇場が1939年2月21日に初演し、ここから各劇場に拡散する。ボリショイ劇場ではソ連時代に639回上演されている。¹²⁾

またこの他、タイトルや台本改訂を行い、一時期上演された作品に《王は愉しむ》、《フローリヤ・トスカ》等があった。これらは、それぞれ《リゴレット》、《トスカ》の中で数えず、そのままの表記で「改訂」と記載の上、扱った。

この先で報告する解析結果は、今後の確認作業で容易に変わりうる数字にもとづくため、あくまで近似値であることをご了承ください。

また最後に、「本館」と「別館」の変遷について触れておく。この検証の結果、【図表2】の通り、2つの所属組織が名称および会場を変えていった変遷が具体的な日付と共に一望された。別館は1989年5月9日を最後に、ソ連時代における公演がなくなっている。

【図表2 本館と別館の名称・会場の変遷】

開設・移設日	本館	別館
1917.8.30 –	本館 Osnovnaya stsena	
1922.1.8 – 1924.6.8		新劇場 Noviy teatr
1924.9.2 – 1928.9.19		実験劇場 Èksperimental'niy teatr
1928.9.20 – 1930.6.17	第 1 国立オペラ・バレエ劇場 1-y Gos. akad. teatr operi i baleta (1-y GATOB)	第 2 国立オペラ・バレエ劇場 2-y Gos. akad. teatr operi i baleta (2-y GATOB)
1930.6.18 – 1941.4.21	本館 Osnovnaya stsena	別館 Filial
1941.10.14 – 1943.7.15	(クィプシシェフ市への疎開時) クィプシシェフ文化会館 Dvorets kul'turi im. V. V. Kibisheva	
1943.9.26 – 1959.12.8	本館 Osnovnaya stsena	
1961.12.23 – 1989.5.9		クレムリン大会宮殿 Kremlevskiy Dvorets S"ezdov (KDS)
– 1991.12.31.		

4. 検証結果

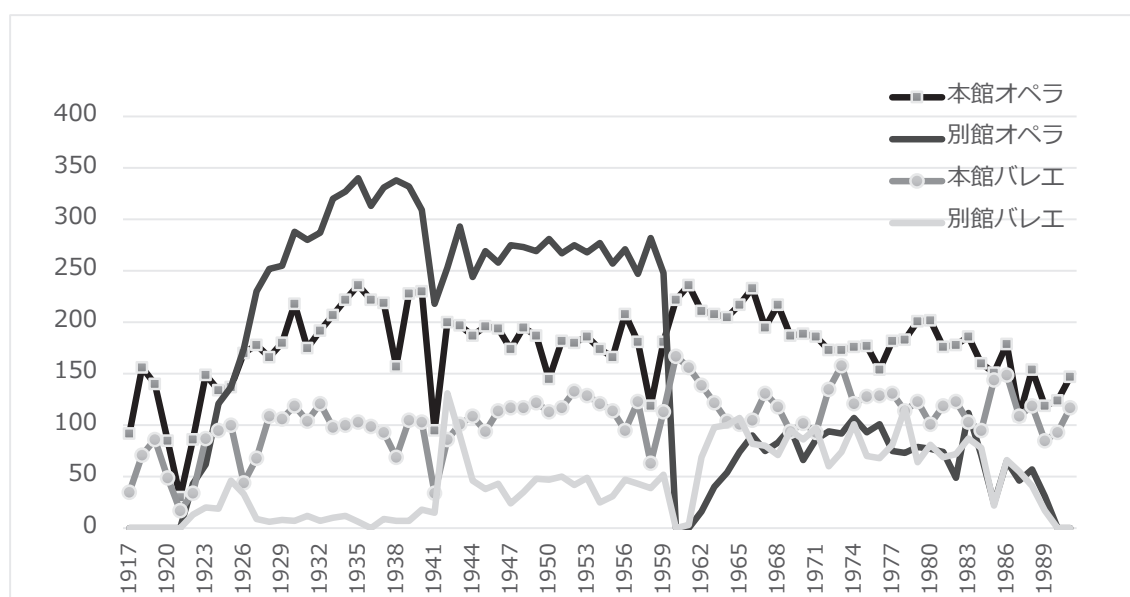
それでは以下、検証結果に入りたい。まず概要を確認すると、この期間中、何らかのイベントが開催された日にちは全19,224日であった。これは年平均256日にあたる。また、

12) オリジナル版《皇帝に捧げた命》はボリショイ劇場では1989年12月25日に復活上演され、ソ連崩壊までに13回上演されている。

オペラの通常公演演目延べ数は 24,824 件、バレエの同演目は 11,360 件であった。

本館と別館の通常公演と見なせるオペラ演目、バレエ演目の上演数をグラフ化したのが、【図表 3】である。本館ではソ連期全体にわたって、オペラ・バレエともに一定数を公演していたことが分かる。別館の方は、公演が一旦なくなる 1959 年末まではオペラが大多数を占めていた一方、再開した 1961 年末以降は、大体同じ比率でオペラとバレエを取り上げるようになった。また別館では特にソ連末期に向けて徐々にラインが先細りしている様子が見て取れるが、これは別館の会場がクレムリン大会宮殿に移って以降、通常公演が減り、外部組織の公演が増えていった状況を映している。

【図表 3 本館・別館のオペラとバレエ：上演数の変遷】



次の【図表 4】は、言語別にオペラの上演総数と作品数を一覧したものである。

最上位はロシア・オペラで 12,605 上演と突出している。これは全体の 5 割強に上る。次にイタリア語オペラが全体の約 3 割と続き、残りの 2 割を他の言語オペラが占める。そ

【図表 4 言語別オペラ(*ロシア関連のみ、ロシア・ソヴィエト・国外ロシアに細分化)：上演総数、作品数】

言語別	上演総数	作品数	全体の割合
ロシア*	12,605	35	50.78%
イタリア	7,258	24	29.24%
フランス	2,616	18	10.54%
ソヴィエト*	1,610	44	6.49%
ドイツ	276	8	1.11%
チェコ	170	2	0.68%
イギリス	110	2	0.44%
ポーランド	101	1	0.41%
国外ロシア*	48	2	0.19%
ハンガリー	30	2	0.12%

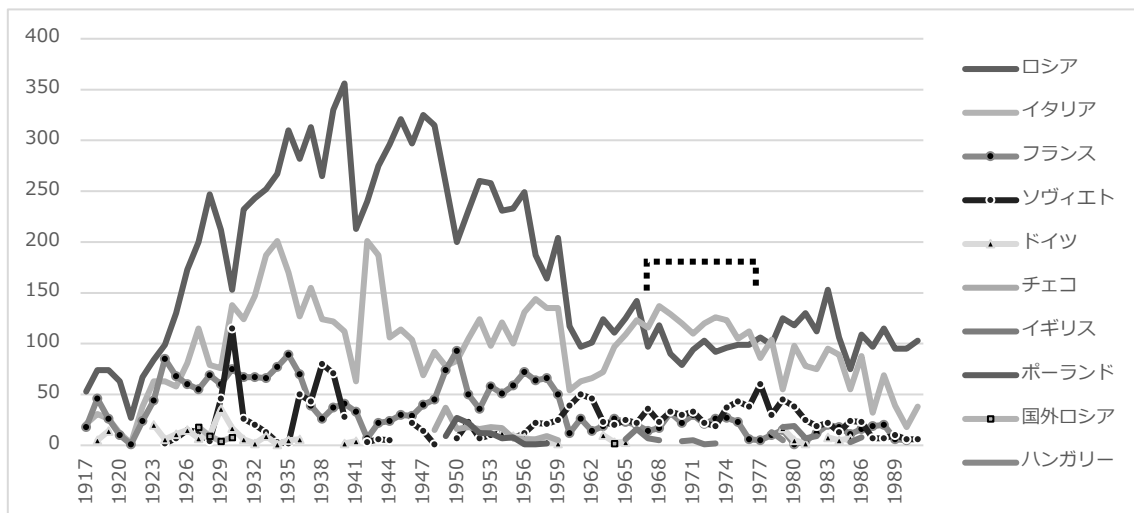
の内訳は、フランス語オペラが約1割、ソヴィエト・オペラが約0.6割で、このほかの外国語オペラはドイツ、チェコ、イギリス、ポーランド、国外ロシア、ハンガリーで全てであった。

注目したいのは、ソヴィエト・オペラの作品数である。44作品と最も多く取り上げられた一方、上演数は全体の6%強であった。この数字はすなわち、1作品あたりの上演数が極めて少ない様子を端的に示している。ソヴィエト・オペラの上演総数をロシア・オペラのそれと比較してみると、その13%にも満たない。ロシア・オペラを技法的な範とし、そこから同時代的なイデオロギーを体現したソヴィエト・オペラがめざされていた一方で、ボリショイ劇場の現場ではロシア・オペラが圧倒的な存在感を示し、ソヴィエト・オペラは稀少であった状況が窺える。

次に【図表5】でこれらの上演数の変遷を折れ線グラフで表した。ロシアとイタリア語オペラ、フランス語オペラは線が途切れることなく続くが、それ以外の線は切れている。ソヴィエト・オペラも、1941、1945年の独ソ戦の開戦と終戦年、またジダーノフ批判直後にあたる1949年は公演数が0となる。その他の外国オペラはすべて断続的である。

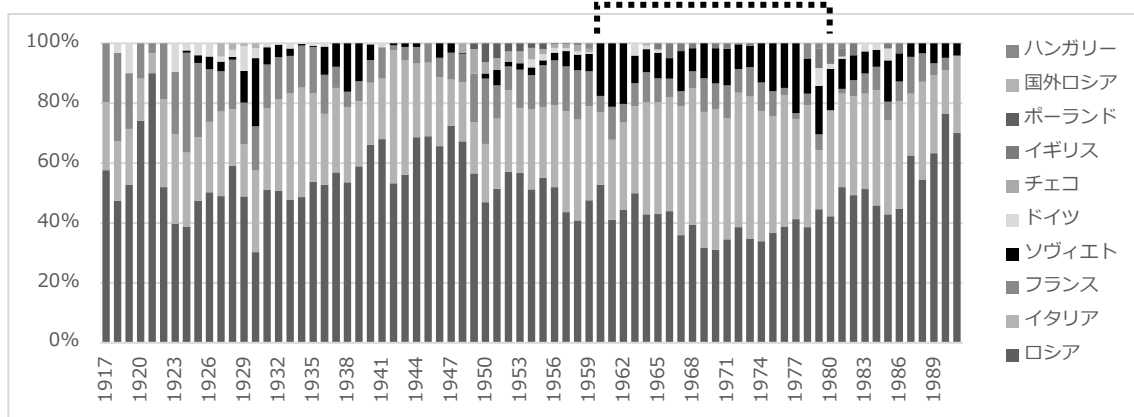
注目したい点として、1967～76年のちょうど10年間のみ、イタリア語オペラがロシア・オペラを超えている。そして1977年にまたイタリア語オペラがロシア・オペラを下回り、下降線を描くのと反比例して、ここでソヴィエト・オペラが上向している。1979年にはイタリア語オペラ55件、ソヴィエト・オペラ45件と肉迫する瞬間を迎える。1960年代末よりロシア・オペラに目立って依存しないバランスが取られ、1970年代後半に至り、ソヴィエト・オペラの占める割合が一時的に大きくなった様子が窺える。

【図表5 言語別オペラ：上演数の変遷】



こうした状況は、【図表6】の言語別オペラの上演数の比率グラフからも、端的に見て取れる。

【図表 6 言語別オペラ：上演数の比率】



ここからは総じてロシア・オペラが全体の半数以上を占めている様子が顕著である。ソヴィエト・オペラに注目すると、まず 1930 年に局所的に割合を強めたことが認められる。ここで初めてフランス語オペラを抜き、イタリア語オペラの 27% に迫る勢いで、23% まで増えた。その後、特に第 2 次大戦以降は不安定になるが、明らかに 1960 年を境に変わり、細いながらも帯となり始め、安定的に取り上げられるようになった様子が分かる。この 1960 年から 80 年にかけては平均して全体の 13% を占め、ボリショイ劇場の現場でソヴィエト・オペラが存在感を主張する時期が実質的によろやく到来したといえる。

次の【図表 7】では、ソヴィエト・オペラを除く、言語別オペラのタイトルを一覧した。

ロシア・オペラでは《エヴゲーニイ・オネーギン》が突出し、《スペードの女王》が続く。両作品のみが 4 桁に上っている。両作ともソヴィエト・オペラに対して要求された肯定的な人生観とは無縁であるが、今日へと至る二大オペラ、古典的遺産のイメージが、こうして共有されてきた様子が認められた。

またこの他の演目もその大部分は現在に続く人気のレパートリーであるが、その中で 354 回上演されていたナプラーヴニクの《ドゥブローフスキイ》からは唯一、現在とは異なる目線や背景を窺わせる。

外国語オペラは 19 世紀の作品がほとんどだが、注目したい点として、存命中の同時代作曲家で取り上げられた唯一の例であるブリテンの《夏の夜の夢》がある。これは 1965 年から 73 年にかけて計 46 回、上演された。同時代作曲家であるプーランクの《人間の声》も同じく 1965 年に登場したが、こちらは 2 回をみの公演で、作曲家の没後 2 年目にあたるため、やはりブリテン作品の扱いが別格であったことが分かる。

ブリテンが生涯にわたりソ連びいき、親ソ家であったことはよく知られている (Kovnatskaya 2018, Pyke 2016)。上述した上演状況は、ソ連側でもたしかに VIP 扱いしていた様子を伝えるものである。折しもブリテンは 1963 年から 71 年にかけて 6 回ものソ連訪問を果たしていた。滞在中にはショスタコーヴィチをはじめとするソ連音楽家との親交を深めたり、モスクワやレニングラードで折よく開催されていた「英国音楽週間」などのイベントに参

【図表7 ソヴィエトを除く、言語別オペラ：全演目(上演回数順)】

言語別	作品	上演回数	言語別	作品	上演回数
ロシア	エヴゲーニイ・オネーギン	1882		道化師	114
	スペードの女王	1065		ドン・ジョヴァンニ	83
	皇帝の花嫁	980		カヴァレリア・ルスティカーナ	79
	イーゴリ公	857		オテロ	71
	デーモン	835		仮面舞踏会	61
	ルサルカ [ダルゴムィーシスキ]	807		コジ・ファン・トゥッテ	54
	イヴァーン・スサーニン 【《皇帝に捧げた命》の改訂】	638		四人の田舎者	45
	ボリス・ゴドゥノフ	505		マクベス	41
	サルタン皇帝の物語	481		トゥーランドット	39
	サトコー	437		ファルスタッフ	27
	イオラータ	430		王は愉しむ 【《リゴレット》の改訂】	8
	ルスラーンとリュドミーラ	427		美しき水車小屋の娘	6
	雪娘 [リームスキイ=コールサコフ]	423		身の毛もよだつセヴィリアの理髪師 【《セヴィリアの理髪師》の改訂】	2
	マゼーパ	391	フランス	カルメン	933
	プスコフの娘	387		ファウスト	639
	ドゥブローフスキイ	354		ラクメ	426
	ホヴァーンシチナ	348		ロミオとジュリエット [グノー]	190
	石の客	196		ウェルテル	103
	チェレヴィーチキ	194		フラ・ディアヴォロ	78
	キーテジ町の物語	182		ウィリアム・テル	55
	モーツァルトとサリエリ	150		マノン	48
	五月の夜	136		オーレードのイフィジェニー	39
	ソローチンツィの定期市	99		美しきエレヌ	27
	エスメラーリダ	73		サムソンとデリラ	24
	金鶏	70		ユグノー教徒	23
	魔性の女	57		真珠とり	16
	悪魔の力	53		マスコット(美しい太陽)	6
	クリスマス・イヴ	35		アング夫人の娘	2
	ムラーダ	23		ミニョン	2
	ノルドランドのオーレ	17		人間の声	2
	サランボー	14		ファウストの劫罰	1
	レイリーとマジヌーン	14	ドイツ	ローエングリン	105
	皇帝に捧げた命	13		ラインの黄金	53
	オルレアン乙女	12		フィデリオ	37
	不死身のカシチェイ	10		ニュルンベルクのマイスタージンガー	25
	タラス・ブーリバ	4		サロメ	19
	貴族夫人ヴェーラ・シェローガ	3		ヴァルキューレ	18
イタリア	椿姫	1457		さまよえるオランダ人	16
	リゴレット	1321		タンホイザー	3
	セヴィリアの理髪師	1203	チェコ	売られた花嫁	162
	蝶々夫人	845		イエヌーフア	8
	アイーダ	474	イギリス	ジュリアス・シーザー	64
	フィガロの結婚	345		夏の夜の夢 [ブリテン]	46
	トロヴァトーレ	275	ポーランド	ハルカ	101
	トスカ	269		3つのオレンジへの恋	39
	ドン・カルロ	198	国外ロシア	兵士と悪魔の物語	9
	フローリヤ・トスカ 【《トスカ》の改訂】	122		青髭公の城	22
	ボエーム	119	ハンガリー	バーンク・バーン	8

加している。さらに自作公演にも出席していた。これはブリテン自身のソ連訪問に絡ませてレパートリー管理委員会が動いたということであり、そもそも20世紀外国語オペラの上演がほとんどない中で、ソ英交流のアピールも絡め、この46回という数字が持つ意味はきわめて大きいといえる。

また同様に特異な例として、国外ロシアに挙げた、ストラヴィーンスキの《兵士の物語》(公演では《兵士と悪魔の物語》と表記)がある。上演データからは、ストラヴィーンスキが祖国への帰国が叶った1962年の2年後から、ストラヴィーンスキ作品が如実

【図表 8 上演数の上位 20 作品】

	言語別	作品	上演数
1	ロシア	エヴゲーニイ・オネーギン	1882
2	イタリア	椿姫	1457
3	イタリア	リゴレット	1321
4	イタリア	セヴィリアの理髪師	1203
5	ロシア	スベードの女王	1065
6	ロシア	皇帝の花嫁	980
7	フランス	カルメン	933
8	ロシア	イーゴリ公	857
9	イタリア	蝶々夫人	845
10	ロシア	デーモン	835
11	ロシア	ルサルカ	807
12	フランス	ファウスト	639
13	ロシア	イヴァーン・スサーニン	638
14	ロシア	ボリス・ゴドゥノフ	505
15	ロシア	サルタン皇帝の物語	481
16	イタリア	アイーダ	474
17	ロシア	サトコー	437
18	ロシア	イオラータ	430
19	ロシア	ルスラーンとリュドミーラ	427
20	フランス	ラクメ	426

に取り上げられるようになった動きが認められる。《兵士の物語》も 1964 年に登場し、これは 9 回の上演であったが、このほか、1932 年を最後に消えていたバレエ《ペトルーシカ》がやはり 64 年に再登場、また《火の鳥》も同年から、《春の祭典》も翌 65 年から、初登場している。演目決定にかかる背景については今後の課題となるが、ボリショイ劇場での登場状況とこうした国外作曲家に対する党内評価は無関係ではないだろう。

続いて、言語別によらず、全ての演目で上演数の高い 20 作品を一覧したのが【図表 8】となる。むろん《イヴァーン・スサーニン》は除くものの、近年のボリショイ劇場、マリイーンスキイ劇場、ミハイロフス

キー劇場の上演演目と対照してみても、現在のロシアの歌劇場のレパートリーと大差なく、また古典レパートリーが優勢であった様子が認められる。

5. ソヴィエト・オペラの上演状況

こうした 19 世紀作品からなるレパートリー、つまり固定演目の狭間で、入れ替わり激しく、数的にはもっとも多く取り上げられたのがソヴィエト・オペラであった。次の【図表 9】では登場順で全てのソヴィエト・オペラを一覧した。作曲家名、世界初演やボリショイ初演日の情報は、電子アルヒーフなどで確認の上、筆者が加筆した。

この一覧から 2 点指摘しておきたい。まず、世界初演となった作品の多さである。表の右から 4 列目の「ボリショイ劇場初演日」に灰色背景が付いている日付は、世界初演であることを示している。全 44 作品中、28 作品、つまり 63% の作品がここで初演を迎えたことになる。この数字は、冒頭より言及してきたとおり、ボリショイ劇場での公演がソヴィエト・オペラとしての成功の試金石になっていた状況を端的に示しているといえる。

次に注目したいのは、作品の登場期間年数と年平均回数との関係である。たとえば最初の《トリルビー》の場合、1924 年から 35 年まで、通算すると 12 年に渡って計 80 回上演され、年平均では 6.7 回取り上げられたことになる。このように機械的に年平均を数値化すると、次の《ステパン・ラージン》から 51 年に登場した《心から》までは期間年数は短いものが多い一方で、年平均の回数が 2 桁に上るものが散見される。

これがちょうど 53 年以降から逆になり、今度は期間は長く、年平均回数は少ないもの

が続いていることが分かる。つまり、当初は短く重点的に取り上げられていた上演状況が、スターリンが死去した53年を境に、長く細くの形にきれいに移行した様子が見て取れる。こうした上演方式が、上の【図表5・6】で確認した1960年代からのソヴィエト・オペラの比率変化を下支えしたと考えられる。

【図表9 ソヴィエト・オペラ全44作の一覧(登場順) 初演日中の灰色背景は世界初演を指す】

作品	作曲家	上演回数	世界初演	ポリショイ劇場初演日	上演期間	期間年数	平均回数/年
トリルビー Tril'bi	ユラソフスキ	80	1924	1924.9.2	1924-1935	12	6.7
ステパン・ラージン Stepan Razin	トリオーティン	11	1925	1925.12.20	1925-1926	2	5.5
デカブリスト Dekabristi	ソロタリョーフ	9	初版 1925	1925.12.26	1925-1926	2	4.5
兵士イヴァーン Ivan-soldat	コルチマリョーフ	6	1927	1927.4.5	1927	1	6.0
フレンゴ Flengo	ツイービン	11	1918	1927.11.9	1927-1928	2	5.5
かもの美術家 Tupeyniy khdozhnik	シショーフ	21	1929	1929.3.24	1929-1930	2	10.5
太陽の息子 Sin solntsa	ヴァシレーンコ	29	1929	1929.5.24	1929-1930	2	14.0
突破 Proriv	ポトーツキ	53	1930	1930.1.5	1930-1931	2	26.5
ザグムク Zagmuk	A.A.クレーイン	15	1930	1930.5.29	1930-1931	2	7.5
アルマスト Almast	スベンディアーロフ	29	1930	1930.6.23	1930-1932	3	9.7
十月の糧 Vishka Oktyzbrya	ヤヴォールスキ	1	1930	1930.11.6	1930	1	1.0
ムツェンスク郡のマクベス夫人 Ledi Makbet Mtsenskogo uezda	ショスタコーヴィチ	6	1934	1935.12.26	1935-1936	2	3.0
静かなドン Tikhii Don	ジェルジーンスキ	141	1935	1936.3.22	1936-1940	5	28.2
開かれた処女地 Podnyataya tselina	ジェルジーンスキ	72	1937	1937.10.23	1937-1940	4	18.0
戦艦ボチヨムキン Bronenosets Potyomkin	チシコー	17	1937	1938.1.5	1938	1	17.0
母 Mat'	ジェロビンスキ	12	1939	1939.3.25	1939	1	12.0
アベサロームとエテーリ Abesalom i Eteri	バリアシヴィーリ	48	1919	1939.6.19	1939-1947	9	5.3
モスクワ近郊にて(第3場) Pod Moskvoy	カバレーフスキ	3	1942	1942.11.7	1942	1	3.0
砲火の中で【《モスクワ近郊にて》の改訂】 V ogne	カバレーフスキ	11	1943	1943.9.19	1943-1944	2	5.5
ベーラ Béla	アレクサーンドロフ	12	1946	1946.11.29	1946-1947	2	6.0
偉大な友情 Velikaya druzhba	ムラデーリ	3	初版 1947	1947.11.7	1947-1948	2	1.5
極寒の精 Morozko	クラセフ	26	1950	1950.11.6	1950-1953	4	6.5
心から Ot vsego serdtsa	ジューコフスキ	12	1950	1951.1.16	1951	1	12.0
デカブリスト Dekabristi	シャポーリン	69	1925	1953.6.23	1953-1969	17	4.0
ニキータ・ヴェルシーニン Nikita Vershinin	カバレーフスキ	12	1955	1955.11.26	1955-1958	4	3.0
じゃじゃ馬ならし Ukroshcheniye stroptivoy	シェバリー	84	1955	1957.7.24	1957-1968	12	7.0
母 Mat'	フレーニコフ	28	1957	1957.10.26	1957-1962	6	4.7
ジャリリ Dzhali'	ジガーノフ	13	1957	1959.6.19	1959-1961	3	4.3
戦争と平和 Voina i mir	プロコフィエフ	137	1955	1959.12.15	1959-1984	26	5.3
真実の人間の物語 Povest' o nastoyashchem cheloveke	プロコフィエフ	38	1960	1960.10.8	1960-1986	27	1.4
人間の運命 Sud'ba cheloveka	ジェルジーンスキ	19	1961	1961.9.30	1961-1962	2	9.5
愛だけでなく Ne tol'ko lyubov'	シチエドリ	6	1961	1961.12.25	1961-1962	2	3.0
十月 Oktyabr'	ムラデーリ	76	1964	1964.4.22	1964-1981	18	4.2
無名兵士 Neizvestniy soldat	モルチャーノフ	44	1967	1967.4.29	1967-1975	9	4.9
楽観的な悲劇 Optimisticheskaya tragediya	ホールミノフ	34	1965	1967.10.27	1967-1977	11	3.1
雪の女王 Snezhnaya koroleva	ラウフヴェールゲル	87	1969	1969.3.22	1969-1980	12	7.2
セミョーン・コトコフ Semyon Kotko	プロコフィエフ	55	1940	1970.4.4	1970-1986	17	3.3
賭博者 Igrok	プロコフィエフ	50	1929	1974.4.7 ロシア語完成版(1928)の舞台初演	1974-1982	9	5.6
朝焼けは静かなれど Zori zdes' tikhiye	モルチャーノフ	114	1973	1975.4.11	1975-1989	15	7.6
月の誘惑 Pokhishcheniye Lunī	タクタキシヴィーリ	20	1977	1977.3.25	1977-1982	6	3.3
死せる魂 Myortviye dushi	シチエドリ	48	1977	1977.6.7	1977-1985	9	5.3
革命への召喚(レニニアーナ) Revolutsiesy prizvanniye (Leniniana)	ラーザレフ	9	1979	1979.4.22	1979-1980	2	4.5
カテリーナ・イズマイロヴァ 【《ムツェンスク郡のマクベス夫人》の改訂】 Katerina Izmaylova	ショスタコーヴィチ	10	1963	1980.12.25	1980-1983	4	2.5
修道院での結婚 Obrucheniye v monastire	プロコフィエフ	29	1946	1982.12.26	1982-1991-	10-	2.9

続いて、【図表 10】の上演回数順の一覧をご覧ください。

ソ連時代もっとも上演されたのが、1936～40年という短期間に141回上演された《静かなドン》であり、これに1959年からの《戦争と平和》、1975年からの《朝焼けは静かなれど》が続く。《静かなドン》は、プラウダ批判で標的にされた《ムツェンスク郡のマクベス夫人》と対照的に、「歌謡オペラ」として高い公式評価を得た作品であった。だが上述のとおり、ボリショイ劇場での上演は戦前までの一局集中であり、その後の再演に至らなかった。

こうした再演の有無、演目の取り上げ方といった上演体制を視覚化するために、【図表 11】でソヴィエト・オペラの上演数の変遷をグラフ化した。

ここからも1953年前後を境として、一局集中的な上演状況から、細く長くの上演状況に変わったことが端的に見取れる。

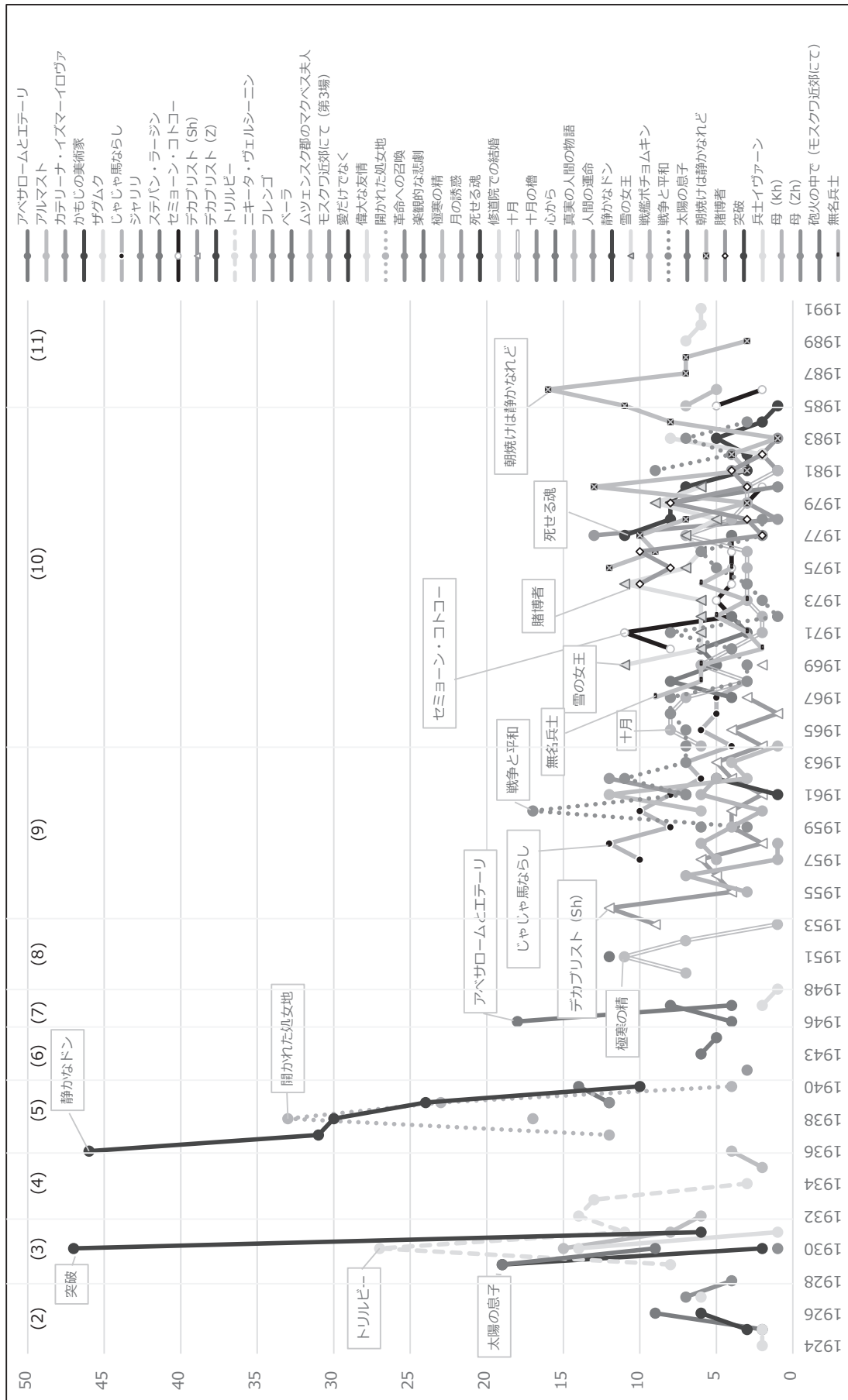
また、ソ連音楽史を時代区分で捉える際には、視点により諸説が可能だが、この表の動きに合致する区分として、下記11の時局を挙げた。

- (1) 内戦と戦時共産主義期(1917～21年)
- (2) ネップ期(1921～28年)
- (3) 第一次5ヵ年計画期(1928～32年)
- (4) 芸術諸団体の改組(1932年～)
- (5) プラウダ批判(1936年～)
- (6) 独ソ戦(1941年～)
- (7) 戦後(1945年～)
- (8) ジダーノフ批判～スターリン死去(1948～53年)
- (9) 雪解け～スターリン批判・フルシチョフ期(1954～64年)

【図表 10 ソヴィエト・オペラの一覧(上演回数順)】

	作品	上演数
1	静かなドン	141
2	戦争と平和	137
3	朝焼けは静かなれど	114
4	雪の女王	87
5	じゃじゃ馬ならし	84
6	トリルビー	80
7	十月	76
8	開かれた処女地	72
9	デカプリスト[シャポーリン]	69
10	セミヨン・コトコフ	55
11	突破	53
12	賭博者	50
13	アベサロームとエテール	48
13	死せる魂	48
15	無名兵士	44
16	真実の人間の物語	38
17	楽観的な悲劇	34
18	アルマスト	29
18	修道院での結婚	29
20	太陽の息子	28
20	母[フレーンニコフ]	28
22	極寒の精	26
23	かもしの美術家	21
24	月の誘惑	20
25	人間の運命	19
26	戦艦ボチョムキン	17
27	ザグムク	15
28	砲火の中で【《モスクワ近郊にて》の改訂】	14
29	ジャリリ	13
30	ニキータ・ヴェルシーニン	12
30	ペーラ	12
30	心から	12
30	母[ジェロビンスキイ]	12
34	ステパン・ラージン	11
34	フレンゴ	11
36	カテリーナ・イズマールロヴァ【《ムツェンスク郡のマクベス夫人》の改訂】	10
37	デカプリスト[ゾロタリョーフ]	9
37	革命への召喚	9
39	ムツェンスク郡のマクベス夫人	6
39	愛だけでなく	6
39	兵士イヴァン	6
42	偉大な友情	3
42	モスクワ近郊にて	3
44	十月の櫓	1

【図表11 ソヴェイエト・オペラ：上演数の変遷】



(10) ブレジネフ期(1964～84年)

(11) ペレストロイカ(1985～91年)

ここから6点指摘したい。1つ目は、新時代のオペラ上演がもっとも活性化していたと見受けられるのは、(3)「第一次5か年計画」の時期であった点である。《突破》が牽引する形で、ピークの1930年には7作品で計115公演が行われた(【図表5】も参照)。2つ目は、1936年ブラウダ批判後の4年間は《静かなドン》と《開かれた処女地》、つまりジェルジーンスキイ作品のほぼ独壇場であったという点である。3つ目は独ソ線の開始・終結年(1941、45年)にソヴィエト・オペラは制作されなかった。これは戦局の激しさから領けるが、同様に1948年のジダーノフ批判後も、厳密には48年1月から50年10月までの約3年間も、ソヴィエト・オペラは登場しなかったことが確認された。これは、ジダーノフらの理念が現実的なものとして現場関係者に理解されなかった様子、オペラ制作の稼働そのものに破綻をきたした様子として捉えられる。そして、ようやく50年11月から登場し、53年1月まで公演が継続できた唯一の作品が《極寒の精》という民話オペラであった。4つ目は、上述したとおり明らかにスターリン死後の53年から、回数は多くないものの、ソヴィエト・オペラを長く上演する体制に変わった様子が認められる点である。5つ目として、この体制が(10)のブレジネフ期でも継続され、作品数も増えてゆき、稀少ながらもレパートリーの定着と言える状況に初めてなった様子が観察できる。しかし6つ目として、ペレストロイカ期に入り、ソヴィエト・オペラの登場は希薄となり、ふたたび方向性を見失った様子が見てとれる。

さらに俯瞰すると、1953年を境に上演体制が下記のように変質した様子が認められる。

- ① 1年あたりの平均レパートリー数：【1953年の前(上演のない年を除く)】2.1作品
→【1953年以後】4.7作品
- ② 1年あたりのソヴィエト・オペラの平均上演数：【前】27公演 → 【後】25公演
- ③ 1年あたりの各作品の平均上演数：【前】9.4回 → 【後】4.6回
- ④ 1作品あたりの平均上演期間：【前】2.8年 → 【後】10年
- ⑤ 1作品あたりの平均上演総数：【前】27回→【後】47回

つまり1953年以後は①レパートリー数が倍増するも、②ソヴィエト・オペラの公演数は大差ないため、必然的に③各作品の登場頻度は閑散としたものであった。とはいえ後者は④長期にわたって上演されたため、総じて⑤作品の上演総数自体は増えている。いわば高密度の短期集中から、低密度でも長期重複の体制へと変質したのである。オペラ公演が相対的に減っていった後期ソ連において、月平均2作ずつ某かのソヴィエト・オペラが登場したということは、小規模ながらも「ソヴィエト・オペラ」の存在感を主張していたことだろう。またそれぞれ平均10年にわたり毎年4.6回ずつ上演されたということは、各作品もそれなりに認知されていたことだろう。だが1953年後に突出したオペラが出てこなかったこと、また53年前でも一切再演がなされなかったという事実は、成功例としてのソヴィエト・オペラの不在を示す証左に他ならない。

6. おわりに

一連のデータから映し出されたのは、政治状況・文化環境に短いスパンで左右されながら展開したソヴィエト・オペラの上演状況であった。全体主義化が推し進められたスターリン主義下において、ソヴィエト・オペラは少なくともボリショイ劇場では混迷しており、戦中を除き、もっとも方向性が見えなくなった時期はジダーノフ批判直後であった。ソヴィエト・オペラの演目の継続性がようやく見えてくるのは雪解け・フルシチョフ期以降であり、その形を継承した結果、突出した存在はないもののある意味、盤石に展開したのは、後期ソ連のブレジネフ期であった。こうした状況では、渦中の劇場関係者たちが戦前から戦後へとまたぐ「ソヴィエト・オペラ」という共有イメージを持つことは不可能だったと考えられる。

また劇場のレパートリー全体から見ると、メインであったのは18～19世紀の古典的な作品であり、しかもそこにはソヴィエト・オペラの6倍もの割合で「ブルジョア音楽」であるはずのイタリア語、フランス語オペラが含まれていた。この倍率差は即ち、当局が操作できなかった現場の人気指数を映すものとして捉えられる。短いスパンでの試行錯誤や上演体制の変質は認められるものの、こうした矛盾を孕んだ状況も一因となり、ソ連全体にわたる「ソヴィエト・オペラ」レパートリーの創出は失敗に終わったと言えよう。

本研究ではまずは概観に努めたが、今後はデータの補完作業とともに、個々の事象に特化した検証に入りたい。

本研究は JSPS 科研費(基盤研究 C、研究課題番号 26370103)より助成を受けたものである。

言及文献

Istoriya russkoy muziki, 10V. Kniga I : 1890-1917. Khronograf. 2011. Pod red. E. M. Levashova. Moskva : Yaziki slavyanskikh kul'tur.

Kovnatskaya, Lyudmila. 2018. Glavniye temi : Britten, Shostakovich i drugiye. Sankt-Peterburg, Izdatel'stvo imeni N. I. Novikova.

Pyke, Cameron. 2016. *Benjamin Britten and Russia*. Suffolk : Boydell & Brower.

Vlasova, Yekaterina Sergeevna. 2010. 1948 god v sovetskoy muzike : dokumentirovannoye issledovaniye. Moskva : Klassika-XXI.

Vlasova, Yekaterina. 2017. "The Stalinist Opera Project." *Russian and Soviet Music : Reappraisal and Rediscovery*. Ed. by Patrick Zuk and Marina Frolova-Walker. Oxford : Oxford University Press, (Proceedings of the British Academy, 209), pp. 164-187.

Zarubin, Valerii Il'ich. 1994. Bol'shoy teatr : pervie postanovki oper na russkoy stsene 1825-1993. Moskva : Ellis Lak.

中田 朱美 2007年 「《ムツェンスク郡のマクベス夫人》研究：ショスタコーヴィチにおける「ソヴィエト・オペラ」の探求」東京藝術大学大学院博士課程学位論文(音楽学)(博音第105号)

ボリショイ劇場ウェブページ「電子アルヒーフ Elektronniy Arkhiv」<http://archive.bolshoi.ru/>
Accessed 15 Jan. 2019.